

思春期患者を対象としたSSTについての考察

○羽田野里穂(看護師) 伊藤秀和(准看護師) 小田島早苗(看護師)
医療法人耕仁会札幌太田病院 急性期治療病棟

【はじめに】

看護実践は「援助を求めるニーズを明確にする」「必要とされる援助の提供」「個人(患者)にとって役に立ったかどうかの確認」の3つからなる。筆者は思春期患者のSocial Skill Training(以下SST)プログラムを担当し、参加者と関わる中でSSTは患者にとって役に立っているのか」と疑問を感じた。SSTの実践を振り返ることで、援助方法や看護師としての姿勢を見直すことができたので、その経過を報告する。

【方法】

2023年4月～2024年2月までにSST(週1回実施)に1回以上参加した思春期患者16人を対象とし、年齢、入院期間、SST参加回数、参加者の精神科診断、SST実地状況、参加者の感想を調査した。

【結果】

1. SST参加者：平均年齢18.6歳、平均入院期間70日、平均参加回数4.3回。
2. 主たる診断：自閉スペクトラム症(以下ASD)3人・うつ病5人、双極性障害2人、うつ病/双極性障害もしくはうつ病2人、知的障害1人、その他3人。
3. SST実施状況：SSTの参加誘導に時間を要する対象者が多かった。SSTのテーマはアンガーマネジメントやストレスの対処など事前に参加者から要望を聞き、実施スタッフで決めた。SSTの参加率はASDが78.9%、それ以外の疾患は57.9%だった。
4. 参加者の感想：満足度の平均は4.6点/5点だった。感想は「楽しかった」「面白かった」などの表現が多かった。テーマの内容に言及した感想は少なく、参加者のニーズが満たされているかは不明瞭だった。

【考察】

参加回数が入院日数の割に少なかった理由は、SSTの誘導と参加の促しに時間が掛かったためと考える。導入時に患者個人の理解度に合わせた説明を行うことで参加率が向上することが期待される。ASD患者の参加率が比較的高かったのは、ASDの特徴である行動のパターン化が良く影響したと考えられる。満足度が高かったのは、要望を取り入れたテーマを提供できたからと考える。今回は具体的な感想を得ることができなかったため、終了時のアンケートの中により具体的な選択項目があると、患者の求めるニーズについて理解を深めることができるだろう。SSTの実践状況の調査に取り組むことで、自身の看護が患者のニーズを満たすための援助と、ズレていないかを振り返ることができた。疑問に立ち止まってよく考えることが看護の目的を明確にし、患者個人のニーズや理解度に合わせた看護実践に繋がる。今後も「よく考える」姿勢を持っていきたい。